

研究ノート

「アダム・スミスの価値尺度論」に
ついての海外における諸研究 (11)

—1960年代(その5)—

中 川 栄 治

序

わたくしは、主に今世紀に入ってから海外において発表されてきた「アダム・スミスの価値尺度論」に関係する諸研究を整理する試みの一環として、本誌第4巻第1, 第2, 第3, 第4号において、それぞれ、19世紀末から1910年代, 1920年代, 1930年代, 1940年代に発表された個々の研究の内容を整理する試みを、また、本誌第5巻第2および第3号において1950年代に発表された個々の研究の内容を整理する試みを、なし、そしてそれにつづいて、本誌第6巻第1, 第2, 第3, 第4号では1960年代に海外において発表された諸研究の一部として E. ホイッターカー, W. フェルナー, O. H. テイラー, A. K. ダース・グプタ, M. ブラウグ, F. ベーレンズ, J. オウザー, P. L. ダナーの研究の内容を整理する試みをなした。本稿は、それにひきつづき、1960年代に海外で発表されかつわたくしがみることでできた「アダム・スミスの価値尺度論」に関係する諸研究のうちの一部, I. H. ライマ, W. J. バーバー, E. G. ウェスト, G. ロウザンブルースの所論を整理しようとするものである*。

* 諸研究の発表年度の区分は、本稿にさきだつ諸稿と同様、原則として、著書の場合には、その原版もしくは初版が出版された年度に、あるいはその最初の著作権が成立した年度に、そして、論文の場合には、それが最初に書物あるいは雑誌に掲載された年度に、したがった。ただし、本稿で使用した文献は、必ずしも原版、初版のものではない。

(1) I. H. ライマ (1967)¹⁾

まず、ライマは、1967年に初版が出版された彼の著書において、他財貨に対する支配力としての交換価値と、使用価値との関係にかんする水とダイヤモンドの価値のパラドックスについての『国富論』第1篇第4章の終わりのほうでのスミスの言説を批判したあとで、²⁾『国富論』第1篇の第5章から第7章ではスミスは価値の一決定因としての労働の役割に注意を向けるのであるがそこでは彼は労働と価値との間の関係について多くの点で矛盾、混乱した説明を与えているとしつつ、そのスミスの説明に関連してつぎのような見解を示している。

①スミスは一方で、支配労働価値説とよばれてもよい考えを示している³⁾のであるが、それによれば、商品は、その商品自体と交換に、その商品が直接的にあるいはなんらかの他の商品の形で間接的に支配しうる労働に等しい〔交換〕価値をもつことになるのである。なお、労働がこの意味で用いられるときには、それは、ひとつの価値尺度として役立つのである。⁴⁾

②しかしながらスミスは、他の諸言説において同じほど明確に、労働は価値の原因あるいは決定因であるという考えを示している⁵⁾のであり、それらの言説は、労働はたんに価値尺度というよりもむしろ価値の原因あるいは決定因であるという一つの労働費用説 (a labor cost theory) を提出している⁶⁾のである。

③以上のことに関連して幾つかのことが問題になりうる。第一に、もし労働が価値の尺度であるならば、何故に価値はふつう貨幣価格で表現されるのか。第二に、労働は価値の原因と価値の尺度の両方でありえないのか、すなわち、商品の価値をその商品が含有する労働量に従って定め、そしてその商品の値うちを同量の労働を含有しているなにか他の商品もしくは商品群のタームで測定することができないのか。もしこのことが可能であるならば、労働費用説と支配労働説との間の矛盾は存在しないこととなる。第三に、スミスは労働価値説を「あの初期未開の社会状態」にのみ適

用することを意図していたのであり、そして、土地の占有と資本の蓄積^{ストック}以後は価値の原因は労働だけではないのではないかと考えていた、ということ⁷⁾はありそうなことではないであろうか。

④第一の問題についてのスミスの考えはつぎのようなものであった。すなわち、物々交換といったことが終わると商品を他の商品と交換するよりも商品を貨幣と交換することが「自然的」なこととなる。たしかに金や銀は最も満足のいく貨幣的媒介物である、しかし、それらは、それらを採鉱するのに要する労働量に依存しつつ、他のすべての商品と同様、価値において変化する。また穀物も価値の測定に使用されうるけれどもそれもまた、その生産に要する労働量に依存しつつ価値において変化するであろう (W. N., pp. 35-36. 大河内訳< I >, 61-62ページ。)。したがって、価値はふつう貨幣のタームで表現されるという事実にもかかわらず、労働が、唯一の正確な価値尺度であるとともに唯一の普遍的な価値尺度なのである、すなわち、いついかなるところでもさまざまな商品の価値を比較することのできる唯一の標準なのである (W. N., p. 36. 大河内訳< I >, 63ページ⁸⁾。)

⑤なお、交換価値の決定を説明する問題と価値の測定の問題とは分析的には、別個のものなのであるが、スミス自身は、労働が価値の一原因および一つの価値尺度との両方であると考えることには、なんの難点もみていなかったものであり、そして、第二および第三の問題に関係するスミスの考えはつぎのようなものであった。すなわち、③スミスは一方で、商品は、それが含有する労働の量および質しだいで、ヨリ大きなあるいはヨリ小さな交換価値をもつであろう、とした。たとえば、スミスは『国富論』第1篇第6章の冒頭で、土地の私的所有と資本の蓄積にさきだつ「初期未開の社会状態」では商品はその商品に凝結された (congealed) 労働量に従って価値をもち、そして、等量の労働を含有する諸商品は同等に、互いに交換されるであろう、としている。ところで、このような事情のもとでは、労働を価値の一原因および価値の一尺度の両方として用いることに関しては

なんの困難も存在しはしない。というのは、労働以外の要素は存在せず、そして、すべての取引は等量の労働ということを伴うからである。商品の労働費用は、その商品の労働支配力に厳密に等しいのである。なお、スミスがこのような状態において存すると考えた唯一の問題は、等労働時間はそのまま等労働含有量ということにはならないという事に関係するもの、つまり、労働の質の相違に関するものであった。⁹⁾⑥土地の私有と資本の蓄積にさきだつ前資本主義時代についてのスミスの議論に関しては解釈上の問題は存在しない。生産の唯一の要素が労働であり、諸商品は、それらが含有する労働に従って互いに交換されるのである。かくして労働は、価値の原因でもあり価値の尺度でもあるのである。また、この状態のもとにおいては、全生産物は労働者に属する。それが分け合わなければならない地主も資本家も存在しないのである。しかしながら他方でスミスは、土地が私有されるようになりまた資本蓄積が行われるようになると、生産物のうちのある分け前は資本の所有者と地主のもとへと行くこととなり、この状態のもとにおいては、労働の全生産物はつねに労働者に属するというわけではなくなる、とする。このことはスミスの労働価値説にとって大きな意味をもつ。というのは、もし労働者が生産物を資本の所有者および地主と分け合わなければならないならば、つぎのいずれかのことが結論されなければならないからである。そのうちの一方のものは、進歩した社会では労働が全生産物を創造するわけではなく、そして、地主および資本家のもとへ行く分け前は、彼らが獲得してきた正当な報酬である、というものであり、もう一方のものは、労働者は、当然彼のものである生産物の一部を、奪われている、というものである。前のほうの理解の仕方は、労働価値説を撤回するに等しい、少なくとも進歩した状態については、そうである。それに対し後のほうの理解の仕方は、労働の搾取の理論を提出するものである。これらのうちのいずれの理解の仕方が、スミスの立場に最も近づいているのか。このことについては、利潤および地代の本質、さらに、それらのものの、自然価格および市場価格に対する関係についてのスミスの議

論を検討することが助けとなるのであるが、そのスミスの議論からしてつぎのことがいえる。すなわち、スミスは、資本^{ストック}の所有者が利潤を受け取り地主が地代を受け取るという権利を否定しているわけではなく、むしろ反対に、土地の私有と資本^{ストック}の蓄積にさきだつ「初期未開の社会状態」が過去のものになってしまうとこれらの分け前が存在することは「自然な」ことであると考えているのであり、そしてそのことは、価値問題の観点からすれば、スミスの議論においては、[そのようなものを費用項目として含めたるうでの] 生産費が価値の長期的な決定因でありがちであるということになる、ということを暗に示しているのである。なおスミスの議論ではそのような価値の決定因としての生産費という考えが明確な形で示されているわけでも、労働価値説「先でみたような形で労働を価値に結びつける考え方」が「初期未開の社会状態」に明確に限定されているわけでもなく、そこに明らかにジレンマが生じることになるのではあるが、労働がすべての価値を創造したそれゆえ地主や資本^{ストック}の所有者のための分け前という控除分は労働者に当然属すべきものの搾取を表すのかといえ、スミスはこの方向での議論を展開しようと考えていたわけではない。なぜなら彼の考えていた社会とは、階級的利害の対立の存在しない恵み深い社会であったからである。だが、商品販売の総収入からの地代および利潤の控除は必然的にその商品の労働費用とその商品の労働支配力との間の不一致を意味するといったことを、その後、論じようとしたマルクスのような人々に対して、階級闘争の理論への扉は開かれたことになるのであった。¹¹⁾

1) Ingrid Hahne Rima, *Development of Economic Analysis*, 3rd ed. (Homewood, Illinois: Richard D. Irwin; Georgetown, Ontario: Irwin-Dorsey Limited, 1978; 1st ed., 1967; 2nd ed., 1972). 以下、Rima [1967] と略記する。

2) それについては、Rima [1967], pp. 80-81 を見よ。

3) スミスがそのような考えを示しているものとしてライマは、つぎのようなスミスの文章を引用している。「したがって、およそ商品の価値は、それを所有していても自分では使用または消費しようとせず他の商品と交換しようと思っている人にとっては、その商品で彼が購買または支配できる労働の量に等しい。それゆえ、労働はすべての商品の交換価値の真の尺度である。」(Adam Smith, *An Inquiry into the*

Nature and Causes of the Wealth of Nations, edited.....by Edwin Cannan, with an Introduction by Max Lerner, The Modern Library <New York: Random House, 1937>——以下, *W. N.* と略する——, p. 30. 大河内一男監訳『国富論』<全3巻>, 中央公論社, 1976年,<I>——以下, 大河内訳<I>と略記する, ただし, 本稿で引用する引用文の訳は必ずしもこの大河内訳と一致しない——, 52ページ。)「その価値は, それを所有しそしてそれをある新しい生産物と交換しようと思う人たちにとっては, そうした人たちがそれで購買または支配できる労働の量に正確に等しいのである。」(*W. N.*, pp. 30-31. 大河内訳<I>, 53ページ。) Rima [1967], p. 81.

4) Rima [1967], pp. 81-82.

5) ライマはつぎのようなスミスの文章を引用している。「あらゆるものの^{リアル・プライス}の真実価格, すなわち, どんなものでも人がそれを獲得しようとするにあたって本当に費やすものは, それを獲得するための労苦と骨折りである。」(*W. N.*, p. 30. 大河内訳<I>, 52ページ。)^{ストック}「資本の蓄積と土地の占有にさきだつ初期未開の社会状態のもとにおいては, 種々の物の獲得に必要な労働量の比率が, これらの物を相互に交換するためのルールを可能とする唯一の事情であったと思われる。……ふつう2日分または2時間分の労働の生産物が, 1日分または1時間分の労働の生産物の2倍の値うちがあるというのは, 当然である。」(*W. N.*, p. 47. 大河内訳<I>, 80ページ。) Rima [1967], p. 82.

6) Rima [1967], p. 82.

7) Rima [1967], p. 82.

8) Rima [1967], pp. 82-83.

9) Rima [1967], p. 83. なお, ライマは, 異質労働の問題についてのスミスの取り扱いをつぎのようなものとして示している。すなわち, 労働には, それに伴う困難, 不快, 危険, それが必要とする訓練, 技巧, 創意の程度に, 相違があるため, 等労働時間がそのまま等労働含有量ということにはならない。だが, このことは, 際立った困難をもたらすものではない。というのは, 労働の質のそのような相違は, 異なる報酬に反映されるであろうからである。「社会の進歩した状態においては, 普通以上の辛さや, すぐれた熟練に対するこの種の斟酌が, 労働の賃金についてなされるのが通例であって, おそらくごく初期未開の時代にも, これと同種のなにかが行われていたにちがいない。」(*W. N.*, p. 47. 大河内訳<I>, 81-82ページ。)

スミスは, 賃金率決定の市場の作用の結果, 自動的に, 各労働者によって遂行される労働と釣り合った賃金というものがもたらされるであろうということを, そして, 賃金格差は商品諸価値のなかに反映されるであろうということを, もちろんのことと思っていた。このようにして賃金格差という論題が価値問題についての議論のなかに導入されるのである。その論題は後のほうの章までそれ以上に追求されは

しない、しかし、スミスが、市場が諸商品のなかに体化された労働 (labor embodied) の値うちにそいつつ商品諸価格を定めると信じていたということは、明らかである。かくしてスミスは、諸商品はそれらの商品の労働含有量 (content of labor, labor content) に従って互いに交換され、そしてその労働含有量とは時間、辛さ、さらに、創意といったようなことからなるのである、とするのであった。

「たとえば狩猟民族のあいだで、1匹のビーバーを仕留めるのに、1頭の鹿を仕留める労働の2倍がふつう費やされているとすると、ビーバー1匹はとうぜん、鹿2頭と交換される、すなわち、鹿2頭に値することになるであろう。」(W.N., p. 47. 大河内訳<I>, 80ページ。) Rima [1967], p. 83.

10) そのようなスミスの議論についてのライマによる検討については、Rima [1967], pp. 84-86 を見よ。

11) Rima [1967], pp. 84-87. なお、V. S. アファナセフによれば、スミスは資本による労働の搾取という思想に思い及ばなかったのであろうとライマは主張するのであるが、現代のブルジョア経済学は利潤と地代を「労働者の生産物からの控除」とするスミスの見解を、自らの階級的制約性と弁護論的な志向のためにあいまいにしたがっている、とされる。Vladilen S. Afanasev, *Adam Smith gestern und heute/ 200 Jahre „Reichtum der Nationen“*, hrsg. Peter Thal (Berlin: Akademie-Verlag, 1976), der Abschnitt 3.3—以下, Afanasev [1976] と略記する—, S. 172-173. 芦田亘, 津波古充文訳『スミス経済学の歴史——経済的自由主義の系譜——』(昭和堂, 1981年) 198—199ページ。

I. H. ライマ (1967) についての覚書

ライマによれば、スミスの議論では金や銀さらに穀物は、それらの採鉱あるいは生産に要する労働量に依存しつつその価値が変化するため正確な価値尺度ではありえないとされ、商品の交換価値の唯一の正確かつ普遍的な尺度は、その商品と交換にその商品が直接的にあるいはなんらかの他の商品の形で間接的に支配しうる労働であるとされており、そしてこのような意味で、そこでは、支配労働価値説と呼ばれてもよい考えが示されている、とされるのであった。

また、ライマによれば、「交換価値の原因・決定の説明の問題」と「交換価値の測定の問題」とは分析的には別個の問題であるが、スミスはうえてみたようなものとしての労働（直接的あるいは間接的に支配しうる労働）を価値の尺度としつつ（支配労働価値説）、さらに、労働が価値の唯一の

原因であり諸商品が含有する労働量（ただし、労働の、時間、辛さ、創意等々といったことに関する考慮がくわえられたうえでの労働量。なお、労働の辛さ、創意等々といった労働の質的な相違は、市場の作用の結果、異なる報酬といったことに反映される。〔なお、ライマの理解によれば、スミスの議論では、諸商品に体化されて諸商品が含有することになる労働の質の相違は、労働に対する報酬・賃金の相違に反映され、そしてこの後者の相違が、諸商品の生産に費やされる労働時間の相違とともに、労働含有量・労働費用の相違として、諸商品の交換価値のあいだの相違に反映されることになるのであった。〕）、諸商品に凝結された労働量がそれらの商品の交換価値を決定するという考え（労働費用説）をも持っていたのであり、そして、スミスは労働を価値の原因・決定因および尺度とすることにはなんの難点もみていなかった、とされるのであった。

なお、ライマは、スミスがそのような考えを「資本^{ストック}の蓄積と土地の占有にさきだつ初期未開の社会状態」に適用しているかぎりでは、商品に含有される労働量と商品が支配しうる労働量とは等しくなり、労働を価値の唯一の原因・決定因と同時に価値の尺度とすることには論理上の問題はない、とみるのであるが、ライマはまた、スミスはそのような考えの妥当範囲を「初期未開の社会状態」に明確に限定していたわけでも価値の決定因としての「資本や土地に対する報酬を費用として含む」生産費という考えを明確な形で示していたわけでもないとしつつも、〔また、価値の原因・決定因とは分析的には別個のものとしての、「金・銀、穀物ではなく、支配しうる労働という価値尺度としての労働」という考えの、「初期未開の社会状態」が過去のものとなってしまった状態でのスミスの議論における妥当性それ自体といったことをことさら問題にすることなく、〕資本^{ストック}の蓄積と土地の占有の行われる社会状態での利潤、地代の存在を「自然的な」ことと考えるスミスの議論はこのような社会状態ではうえてみたような生産費が価値の長期的な決定因でありがちであるということになるということを示している〔したがって、労働は、価値の尺度であると同時に価

値の唯一の原因・決定因でもあるという形では、価値と結びつけられるわけではない、ということになる], とみるとともに、他方で、以上のようなスミスの議論は、利潤や地代の存在による商品に体化・凝結された労働量(労働費用)と商品の労働支配力との不一致, 労働の搾取, 階級的利害対立といったことを問題にしようとした人々に対して議論の端緒を提供することともなった, とするのであった。

(2) W. J. バーバー (1967)¹⁾

バーバーは、原版が1967年に出された彼の著書において、スミスは経済価値の問題を取り扱うさい、まず、価値のパラドックスを示すことをつうじて「使用価値」と「交換価値」とを区別し、交換価値のみが経済的にみて関心をひくものであるとし、そしてこの経済価値の問題についての彼の研究のための三段階にわたる計画——(1)価値の「真の」尺度を見きわめること、(2)価値の諸構成部分を分離すること、(3)「市場価格」の「自然価格」からの乖離を説明できそうな諸要因を分析すること——を立てた、とし、²⁾そして、このようなものとしてのスミスの価値分析を検討する過程で、つぎのような見解を示している。

(I) [まず、バーバーは、スミスの価値分析のテーマに関連してつぎのような見方を示している。]: スミスは、価値についての彼の説明は二つの仕事をすると思っていた。まず第一に、それは、少なくとも、市場価格の動きについての部分的な説明を、提供する、と考えていた。さらに(そして彼の推論の一般的な鋒先ということにとってはより重要なことであるが)、それは、長期にわたる集計的経済変動を測定するための一つの基礎をあたえるはずであった。というのは、市場価格はあまりにも気まぐれなものであり、産出高の異時点間の変化を測定するためには満足のいくものではなかったため、安定的で不変であるような標準^{スタンダード}が追求されることとなったのである。³⁾

(II) [注2でみたようにバーバーによればスミスを含む古典学派の論者

たちは価値と価格は別個のものであると考えたとされるのであるが、バーバーは、それではスミスの議論では価値はいかにして確定されるのであったのかという問題を設定し、その問題についてつぎのような見方を示している。〕：スミスは労働が「価値の尺度」であると主張した。⁴⁾だが、労働が「価値の尺度」を提供するという主張には、まったく曖昧さがなかったわけではなかった。価値に対する労働の関係については、少なくとも、二つの異なる理解の仕方が可能である。第一のものは、商品の価値を、その商品の生産に要した労働量に基づかせるものである。スミスはこの理解の仕方を心にいだいていたのであるが、彼はそれを、私的な土地所有と資本の蓄積にさきだつ仮説的な「初期未開の」社会の状況にのみ適用することを選んだ。⁵⁾それにたいし、ヨリ複雑な制度上の状況を考察するさいには、スミスは彼の立場を変えた。つまりそこでは、価値はもはや単純に直接の労働投入のタームででは計算されえない。いまや他の諸要素——とくに土地と資本——が生産過程に貢献することになるのであるが、それらの要素の貢献はそうたやすくは労働単位には還元されえないのである。ここにおいて、スミスは「労働含有量」(‘labour content’) という見解を放棄して、「労働に対する支配力」(‘command over labour’) が価値の適切な尺度であると主張したのである。⁶⁾

(Ⅲ) [つぎに、バーバーは、価値の確定のためのこの後者の手続きがスミスの価値分析においてもつ意義に関してつぎのような見方を示している。]：この迂回的な手続きは、少なくとも、労働単位のタームでの産出高の測定ということを救い出した。さらに、スミスの見解ではそれは、どのようにして価格が現実形成されるかということを見通す力をもたらすのであったのであり、また、この後者の問題についてのスミスの議論は、その副産物として、市場の働きを妨げるような一切の行いはすべて社会的に非難されるべきものであって諸事が市場の「見えざる手」に導かれることによってはるかに良い結果がもたらされるという主張の根拠を提供するのであった。⁷⁾ただし、価値についてのスミスの議論のこのような副産物は、

彼のヨリ大きな議論の筋道にとっては有用なものではあったが、彼の理論構造の形状に主な影響をあたえるものではなかったのであり、長期にわたる経済成長を中心的な問題とするスミスの分析にとっては、国民産出高の変動を測定するための手法を案出するということに対する彼の関心のほうが、ヨリ大きな重要性をもっていたのである。⁸⁾

(Ⅳ)〔このようにバーバーは、実際に経済成長が生じたか否かを確定するために(長期にわたる集計的経済変動を測定するための一つの基礎をあたえるために)国民産出高の変動を測定するための手法を、価格変動が引き起こす歪みを除去するための手法を、現代的な用語でいえば指数もしくはそれに相当するものを、案出するということが、スミスの価値分析におけるヨリ大きな関心事であったとするのであるが、バーバーはさらに、このような問題に対するものとしての、「価値尺度としての労働」というスミスの考えに関連して、つぎのような見方を示している。〕:

①一見したところでは、「労働に対する支配力」というスミスの考えは、こうした指数問題に一つの解答を提供するかのようにはみえた。すなわちそれは、総産出高をそれが購買しうる労働単位数のタームで表すことによって、二時点間の総産出高の変化についての比較陳述が可能になるということ、暗に意味していた。一次接近としては、そのような労働単位数のタームでの表現は、貨幣タームで表されている総産出高を基準賃金⁹⁾で割ることによって得られるであろう。そして、もしもそうした計算による第2期の値が第1期の値を上回っていたならば、成長が起こっていたということが主張されうるであろう、さらにまた、その経済の総産出高にどれだけの変化が生じたかということも、確定できるであろう。だが、このようなものとしての「労働に対する支配力」という公式には、もしも賃金率が第1期と第2期との間で変化するならば、他のすべての諸価格および所得諸分け前がそれと同一割合で変化していたということも仮定できないかぎり、¹⁰⁾さきの計算から得られる値の比較はもはや不可能であろう、という難点、さらに、労働生産性が上昇するケースをうまく取り扱うことができないと

いう難点¹¹⁾が、存在する¹²⁾。

②スミスは経済的変化を測定するための不変の標準を案出することを試みたのであるが、彼は、統計的な目的にとって好都合な手法を案出することを試みることによってこの問題をさらに追求した。すなわち、スミスは一貫して、「労働に対する支配力」が概念的には正しい接近法であるとしたのであるけれども、彼は、それは実際に適用するには厄介なものであるかもしれないということを認識していた。そこで彼は、ついに、食用穀類 (food grains)——彼の用語では「穀物」(‘corn’)——の入手可能性が、たいていの実際目的にとっては、一つの代用物とみなされてよいという結論をくださったのであった。スミスの見解では、穀物は生活資料の主要な構成要素であったのであり、それゆえその入手可能性は、労働に対する支配力を実際に行使するための一つの必須条件であるのであった。¹³⁾

③労働をもって基本的な価値尺度とするやり方は、スミスの手で、さらにもう一つの変容を遂げた。すなわち、スミスはさらに、事実上、労働の労苦と骨折りのために余暇を割愛するときに労働者がこうむる犠牲の安定性¹⁴⁾ということ¹⁴⁾を述べるのである。たしかに長期にわたってみた場合、このような安定性の仮定の現実性ということに対しては異論が生じるかもしれないし、また、事実、労働の苦痛感はかなり変わってしまうかもしれない。¹⁵⁾だが、たとえそうであるとしても、スミスはこんにち長期の経済的変化の分析においてほとんど直接的な注意をはらわれていない非常に当を得た点に、すなわち、経済的な改善の程度は財貨の総体規模の変化によってだけでなくその総体を生産するのに要した尽力によっても判断されるべきであるということに、注意を促していたのである。スミスの「価値尺度としての労働」のこの別形 (version) においては、1単位の労働投入がヨリ多量の財貨に対する支配力をもたらしたときに経済的な改善が生じているとみなされるのである。¹⁶⁾

(V) 〔以上でみてきたように、バーバーによれば、スミスは、一つの代用物という脈絡で穀物にふれつつも、労働を、個々の商品の価値さらに長

期にわたる社会の経済的变化を測定するための基本的な尺度としようとした、とされるのであるが、パーカーはさらにまた、そのようなものとして労働を用いることに伴う問題という形で「異質労働の問題」をとらえつつ、そのような脈絡のなかで問題にされることになるものとしての「異質労働の問題」に対するスミスの対処という形で、スミスの議論に関してつぎのような見解を示している。]：価値分析へのスミスの労働接近法は後の経済諸学派によってきびしく批判されてきたのであるが、¹⁷⁾スミスの接近法に対しては、つぎのような相対的にヨリ重大な批判をも浴びせることができる。それは、彼の労働単位の取り扱いにおけるある矛盾ということに関係するものである。すなわち、彼も認めていたように、労働をなすものとしての一つの総体といったものは、等質的なものから構成されているわけではないのであった。¹⁸⁾その総体を構成するもののうちのあるものは、他のものよりも熟練している（したがってまた、ヨリ生産的である）のであった。では、これらの相違は、どのようにして、ある共通するものへと、還元されるべきであったのか。スミスは、こうした相違の調整は「ある正確な尺度によってではなく、正確ではなくても日常生活の業務を処理してゆくには十分なおおよその同等性を目安にして、市場のかけひきや交渉によって」(W. N., p. 31. 大河内訳< I >, 55ページ。)行われる、と答えた。言い換えると、市場で成立する賃金格差が、各種の労働投入単位にある共通の標準に還元する基礎を提供するのであった。つまり、不熟練労働の1時間を標準単位とすると、2倍の賃金が支払われている労働者による1時間の労働は、2単位に相当するということになるのである。だが、そうすると当然つぎの疑問、すなわち、もしも価値を測定するための各種の単位を評価するためには市場検査で足りるのであるならば、何故に同じやり方が産出高そのものの評価に適用できないのか、という疑問が出てくる。そしてもしそういうやり方が適用できるとすれば、そのときには、価値（自然価格）と現実の価格とを区別するという問題は、完全に消滅してしまうことになるであろう。たとえスミスが近似法なのだとあらかじめ通告すると

しても、そのことによってこうした論理上の落とし穴から逃れることはできないのである。¹⁹⁾

- 1) William J. Barber, *A History of Economic Thought* (Harmondsworth, Middlesex, England: Penguin Books, 1967; reprinted 1970)——以下、Barber [1967]と略記する——。稲毛満春、大西高明訳『経済思想史入門』(至誠堂、1973年)。
- 2) Barber [1967], p. 30. 邦訳、34—35ページ。なお、バーバーは、スミスの分析目標についてのスミス自身による説明からして、スミスはたいいていの経済学者がこんにち適切なものと考えてであろう諸問題からは幾分へだたりのある諸問題を提起していたということは容易にわかる、として、つぎのような説明をなしている。それによれば、こんにちの経済学者がある特定の商品の「価値」を的確に述べることを求められるときには、ふつう、その商品にたいしてどんな価格が市場で成立しているかを確定することを試みることによってすすもうとするであろう。これに対し、古典学派の論者たちは、価格と価値はそうたやすくどちらにでも折りたたまれることのできるものではないということを主張しようと骨を折っていた。「価値」は市場の気まぐれからは独立したものとみられていた。名目価格(あるいは市場価格)は変動するかもしれない、しかし、価値は一定不変にとどまる、というのである。後の多くの評釈者たちは、こうした接近法を不必要な形而上学とみなしてきた。しかし、たいいていの古典学派の論者たちはこの区別をおおいに重んじたのであり、また、彼らの見解では、それは十分な正当性を持つものであった。Barber [1967], pp. 30—31. 邦訳、35ページ。
- 3) Barber [1967], p. 31. 邦訳、35—36ページ。なお、バーバーは、『国富論』の中心課題という観点から、いまみた価値についてのスミスの説明の二つの仕事のうち、後者のものの重要性を強調する。すなわち、バーバーによれば、スミスの分析の中心課題は、彼の著書のフル・タイトルにはっきり述べられているように「諸国民の富の本質と諸原因に関する一研究」ということであった、つまり、ヨリ現代的な用語でいえば、スミスはひとつの経済成長理論を展開することを課題にしていたのであった、とされるのであり、そして(スミスがそうであったように)長期にわたる経済的な進展という問題を取り扱う分析者にとっては実際に成長が生じたのか否かということを確認することができるということが明らかに重要なことであったのであり、そしてこのことは、国民産出高の変動を測定するための手法を、価格変動が引き起こす歪みを除去するための手法を、ヨリ現代的な用語でいえば、指数もしくはそれに相当するものを、必要とした、というのである。(Barber [1967], pp. 27, 33. 邦訳、30ページ、39ページ。)そしてまたバーバーによれば、スミスが経済的变化を測定するための不変な標準を案出しようという彼の試みにおいて幾つかの厄介な障害に遭遇したとしても、彼が取り組んだ問題はやはり現実的かつ重要な問題であったのであり、同様な問題は経済成長についての現代の分析にも残されて

いる、とされる。(Barber [1967], p. 35. 邦訳, 41ページ。)

なお、アフナセフによれば、バーバーを含むブルジョア的な経済成長論者たちはもっぱらスミスの理論の量的側面に専念しつつスミスの学説を分析するのであるが、このやり方は、つぎのような二面にわたる性格をもっている、とされる。一方で、このやり方は、資本主義の搾取的な本質ということに関係するスミスの科学的確認に反対する新しい闘争手段を供給する、すなわち、純粹に量的な考察方法は資本主義の社会経済的内容を消し去ってしまうのである。他方で経済成長の理論家たちは、資本主義経済の量的連関を反映しているスミスの科学的思想に飛びつくことに興味をそそられているのである。Afanasev [1976], S. 177. 邦訳, 203—204ページ。

- 4) なお、バーバーによれば、労働が「価値の尺度」であるというスミスの主張は、彼がすでに展開していた諸テーマとも容易に両立しうるものであったし、さらにそれは、彼の時代の知的風潮とも調和するものであったのであり、少なくとも、ロック以来、イギリス思想の一つの有力な流れは、労働を経済過程への「基本的」ないし「根源的」な貢献者とみなす傾向があった、とされる。Barber [1967]. p. 31. 邦訳, 36ページ。
- 5) なお、バーバーは、スミスが初期末開の社会状態を念頭に置きつつこの理解の仕方を適用している例を示すものとして、つぎのようなスミスの文章を引用している。「たとえば狩猟民族のあいだで、1匹のビーバーを仕留めるのに、1頭の鹿を仕留める労働の2倍がふつう費やされているとすると、ビーバー1匹はとうぜん、鹿2頭と交換される、すなわち、鹿2頭に値することになるであろう。ふつう2日分または2時間分の労働の生産物が、1日分または1時間分の労働の生産物の2倍の値うちがあるというのは、当然である。」(W. N., p. 47. 大河内訳<1>, 80ページ。) Barber [1967], pp. 31-32. 邦訳, 36—37ページ。
- 6) Barber [1967], pp. 31-32. 邦訳, 36—37ページ。なお、バーバーは、この後者の尺度の意味を、つぎのような仮説例を用いて説明しようとしている。それによれば、いま、ある特定量の産出高を生産するのに600単位の労働投入が必要であると考えてみよう、さらに、地主と資本家は、彼らの支配下にある生産要素の用役を提供するに際して、合計して、賃金支払額と同額の報酬を求める(言い換えると、生産の一条件として、利潤プラス地代は賃金支払額に等しくなければならない)と仮定しよう。そのときには、スミスの論法によれば、その総産出高の価値は1,200労働単位——直接労働投入600単位プラス地代と利潤の受領者が「支配」しうる600労働単位——ということになるであろう。Barber [1967], p. 32. 邦訳, 37ページ。
- 7) バーバーは、スミスの議論においては「自然価格」が「価値」に相当し、生産物の真の値うちを示すものとされているとみ、そして、価格形成メカニズムについてのスミスの考え方を理解する鍵は「自然価格」(すなわち価値)の構成要素につい

ての彼の理解の仕方のなかにある、として、おおむねつぎのような説明をなしている。すなわち、スミスの議論では商品の「自然価格」はその商品を市場にもたらすのに要した費用に等しい価格、すなわちそれに要したすべての労働、土地および資本に対する報酬としての自然率での賃金、地代および利潤という成分からなるものとされており、そして、市場価格はこのような明細事項と一致しないかもしれないが、そうした場合でも競争の諸力が作用して、市場価格を自然価格の方に押し戻していくとされている。つまり「自然価格」は、市場の競争諸力をつうじて現実の価格がそれに向かって収斂してゆく傾向をもつ「静止と持続の中心」とされており、スミスはここでは後の経済学者が「均衡」とよんできたきわめて重大な概念に近づいていたのである。〔以上のような意味で、バーバーは、スミスが価値についての彼の説明は少なくとも市場価格の動きについての部分的な説明を提供すると考えていた、と述べたのであろう。〕そしてまたバーバーによれば、市場価格と自然価格についてのこの議論は、その副産物として、市場の働きを妨げるような一切の行い——（たとえば、取引制限とか特許会社への特権の授与のような形で）政府によっておこされたものであれ、（独占とか徒弟奉公に関する諸規則のような形で）民間の関係者からおこされたものであれ——は社会的に非難されるべきものであって諸事が市場の「見えざる手」に導かれることによってはるかに良い結果がもたらされるといふ主張の根拠を提供している、とされるのである。Barber [1967], pp 32-33. 邦訳, 37—39ページ。

なお、バーバーによれば、スミスの自然価格と市場価格との区別に類似した案は低開発地域の研究に携わっているいくつかの欧米経済学者たちによっても援用されているのではないであろうか、とされる。すなわち、バーバーによれば、それらの経済学者たちは、低開発地域では労働の価格は高くつけられすぎており資本の価格は低くつけられすぎているということ、したがってもしも政府が、労働と資本の結合に関する事業家の意志決定は現実の価格によってではなくこれらの生産要素の「真の」稀少性をより正確に反映する「計算」価格によって行われるべきであると強く言い聞かせるならば、経済成長は加速されるだろうということを、主張している、とされるのである。Barber [1967], p. 38. 邦訳, 44—45ページ。

- 8) Barber [1967], pp. 32-33. 邦訳, 37—39ページ。なお、バーバーによれば、価値分析へのスミスの労働接近法に対しては後の経済諸学派からきびしい批判がくわえられてきたのであるが、それらの批判の一つは、スミスのその接近法は価格決定の十分な説明を提供していない、またとくに、市場の作用のうちの需要面を無視している、というものであった、とされる。〔なお、バーバーは、このような視点からスミスに対して無遠慮な批判をなしたものの一例として、Emil Kauder, “Genesis of the Marginal Utility Theory: From Aristotle to the End of the Eighteenth Century”, *Economic Journal*, vol. 63 (no. 251, September 1953) をあげている。

Barber [1967], p. 52n. 21. 邦訳, 65ページ注21。]そして、バーバーは、このような批判に対してつぎのような見解を示している。すなわち、もしスミスが市場価格の形成についての体系的な分析を提出しようとしていたのであれば、こうした批判はもっと説得力のあるものになっていたであろう。しかしながら、実際には、この目標は、スミスの主要なプログラムにとっては末梢的なものであった。彼は、長期にわたる経済的变化を測定するという問題に対して力となるような諸概念を案出することにヨリ一層関心をいだいていたのであった。短期の市場価格の形成についてのヨリ明快な分析を展開するための道具なら、彼にはすでにその用意はあったのである。すなわち、効用および需要という概念（それらの概念は後の一学派によってそれらの本来の目的のために用いられることとなったものである）は、彼がハチスンから吸収した教えの一部をなしていたのである。スミスが価値理論に対するこうした方向づけを受け入れなかったのは、おそらく、彼がそのようなものは彼の中心的な目的にとって関連がないとみなしたからであろう。Barber [1967], pp. 36-37. 邦訳, 43ページ。

なお、以上でみてきたバーバーの所説からつぎのことがいえるであろう。すなわち、バーバーは、スミスの議論では（交換）価値と価格とは区別されるべきものであり、（交換）価値は、市場価格（現実の価格）と区別される「自然価格」に相当するものとして取り扱われているとみるのであるが、バーバーは、どちらかといえば、「価値尺度の問題」と「価値の原因・決定の問題（価値の因果的説明の問題）」との論理的同異といったことは問題にすることなく、市場の働きをつうじての市場価格の自然価格への収斂という形での市場価格の動きについての部分的な説明および長期にわたる集計的経済変動を測定するための一つの基礎の案出ということをスミスの価値分析の内容としてとらえ、そして、その分析を展開するさいにスミスは労働接近法をとった、としているということである。（また、バーバーは、このような意味でスミスの展開している議論をして「労働価値説」とみているようである。この点については、Barber [1967], pp. 37-38, 邦訳, 44ページでのバーバーによる「労働価値説」という言葉の用法を参照せよ。）

なお、アフナセフによれば、スミスの学説を成長理論として解釈することは、スミスの労働価値説を定量的に解釈するためにも、利用されているのであり、この場合には社会経済的な本質を失った労働価値説であるが、スミスの価値理論は、これとの関連では普通、それが現実の成長およびその様式を確認するための手段を提供できるかどうかということをめぐる、研究されている、とされる。そしてアフナセフは、バーバーや一連の成長論者たちがもっぱら関心をもっているのは、このように、労働価値説を使って経済諸量の定量的比較を客観化できるかどうかを吟味することなのであるが、これはスミスの理論体系の中での労働価値説の役割をゆがめるものである、として、つぎのような説明をくわえている。すなわち、スミ

スにとって、労働価値説は、資本主義のうちに大量的にあらわれる経済的関係についての研究の結果であったのであり、資本主義経済の諸現象を分析し、そしてその本質を明らかにするために多かれ少なかれ直観的に適用された方法的な手段であったのであり、労働価値説は決して、成長論者たちの考えつくようなたんなる「経済諸量の度量衡」に引き下げられえないのである。彼らは、資本主義的生産の量的な機能関係を分析するさいに、古典学派の労働価値説のすべての主張を退けることはできないで、いやそればかりか、労働価値説を使って明らかにされた若干の量的な経済関係を、自分たちの分析に利用しようと努力すらしているのである。ただしその場合には、資本主義の経済学の因果関係の諸脈絡は無視、俗流化されているのである。Afanasev [1976], S. 179-180. 邦訳, 206—208ページ。

9) バーバーが原文においてここで使用している用語は the basic wage である。basic wage はふつう生活賃金(生活給:生活費を基準にした給与)や基本給と訳され、また、基本給とは実収賃金 earnings を構成する一賃金項目であって、実収賃金がどのような賃金項目から構成されているかをあらわす賃金体系という概念にかかわるものであるのにたいし、賃金率 wage rate とはふつう、賃金形態の違いということから時間賃金率 hourly wage rate なり出来高賃金率 piece rate なりで定義されるのであるが〔熊谷尚夫、篠原三代平(代表編集委員)『経済学大辞典』(全3巻)(第2版、東洋経済新報社、1980年)、Ⅱ、68ページを参照。〕、ここではバーバーはどちらかといえば、the basic wage という用語を、ある一定の等級、種類の労働に対して支払われる(時間)賃金率、その意味で基準として用いられる賃金といったぐらいのことをあらわすものとして使用しているように思える。

10) このことに関してバーバーはつぎのような説明をなしている。すなわち、もしこうした仮定が置けない場合には、そのようなものとしてのスミスの公式から引き出される結論はまったく人を誤らせるものとなるであろう。たとえば、もしも、他の諸価格および所得諸分け前が以前と同一に留まっているのに賃金下落したとすると、(労働に対する支配力で表された)産出高は、現実には生産の変化が起こっていなかったときにさえ、増大したかのようにみえるであろう。〔注6でみたバーバーの説明を考慮に入れば、ここでは、バーバーはつぎのようなことを言っていると考えることができるであろう。すなわち、スミスの議論では、貨幣タームでの総産出高——個々の生産物の価格と個々の生産物の量との積の総計——は、その産出高を生産するさいの生産要素の用役の提供に対する貨幣タームでの諸報酬の合計——所得諸分け前の合計、賃金総額+利潤総額+地代総額——に等しく(つまり、個々の生産物の価格と個々の生産物の量との積の総計=賃金総額+利潤総額+地代総額)、

支配労働のタームでは、
$$\frac{\text{個々の生産物の価格と個々の生産物の量との積の総計}}{\text{基準賃金}} = \frac{\text{賃金総額} + \text{利潤総額} + \text{地代総額}}{\text{基準賃金} + \text{基準賃金} + \text{基準賃金}}$$
ということとなる。そして、このような関係を保ち

つつ、異なる期のあいだに賃金率に変化があるが現実の生産物の量に変化がない場合に支配労働タームでの産出高の価値が不変となるためには、他のすべての諸価格すなわち個々の生産物の価格、および所得諸分け前も賃金率と同一割合で変化していなければならない、そうでない場合には、支配労働タームでの産出高は、現実の生産物の量に変化がないにもかかわらず、変化するということとなる。] 彼の議論の諸部分において、スミスは、自然賃金率は長期間についてみれば安定的となる傾向があるという立場をとることによって、みずからこの難局から守っているかのようと思われる。だがこの見解は、改善の進行のあいだにおける賃金の推移についての『国富論』の他の箇所で示されている考えと矛盾するのであった。Barber [1967], p. 34. 邦訳, 40ページ。

- 11) このことに関してバーバーはつぎのような説明をなしている。すなわち、そのようなものとしてのスミスの公式は、労働生産性が上昇するケース（すなわち、同一量の労働投入がより多くの産出量を生産する場合）を、うまく取り扱うことができない。つまり、たとえ賃金率が一定であるとしても、このケースでは達成目標とされているある産出水準の生産に必要な賃金総支払額は、以前よりも少ないということになるであろう。そして、もしそれゆえに全体としての産出の価格の低落ということが次に起こるならば（このような状況のもとではよく起こることなのだが）、「労働に対する支配力」による測定は、総産出高が実際には増大していたときでも、それが減少したかのような印象をあたえてしまうかもしれないのである。Barber [1967], pp. 34-35. 邦訳, 40—41ページ。

バーバーによれば、そのようなものとしてのスミスの公式は、このように、労働生産性の上昇があるケースをうまく取り扱うことができないとされるのであるが、同時にバーバーによれば、スミスは、個々の諸企業によって生産される産出量水準が変わるにつれて〔産出物1単位当りの〕生産の諸費用（またそれらの費用に対応して、種々の階級間に分配されることになる〔産出物1単位当りの〕所得という配当物〔生産諸要素の用役の提供に対する報酬〕）が次々に変わっていくわけではないと仮定することによって、暗黙裡に、このような反論からみずからを守ったのであり、かくして、たとえば、靴1足当りの費用は、1日当り100足の靴を生産する設備のある工場においても1日当り10足の靴を生産する工場においても同一ということとなるのである、とされる。そしてまたバーバーによれば、経済的世界が小規模生産者によって支配的な地位を占められていた工業主義（industrialism）の揺籃期にあってはこのような見解はまったく信じがたいものというわけではなかったけれども、そのような見解の正当性はその後の経験によって失われてきた、すなわち、多数の生産分野において、高度な技術が大規模な集中生産に適用されるときには単位費用が相当引き下げられるということが、その後、多くの事例によって証明されてきたのである、とされる。Barber [1967], p. 35. 邦訳, 41ページ。（次ページ

へつづく)

なお、バーバーによれば、スミスは、このように個々の生産者の操業規模の変動が生産性に与える影響を看過していたのではあるが、全体としての経済の拡張がいちじるしい生産性上昇を生み出すということには気づいていた、すなわちスミスは、経済体系の規模が大きくなるにつれて分業が拡大され、そのことが社会全体に利益をもたらすとするのであり、彼はこのような生産性上昇の利益はかなり一様に全生産分野に分配されると考えていたように思えるのである、とされる。〔ただし、バーバーによれば、「労働に対する支配力」というスミスの公式は、このような生産性の上昇があるケースをうまく取り扱うことはできないのである。〕Barber [1967], p. 35. 邦訳, 41ページ。

12) Barber [1967], pp. 34-35. 邦訳, 39-41ページ。

13) Barber [1967]. pp. 35-36. 邦訳, 41-42ページ。

14) バーバーは、スミスがこのような言説をなしているものとして、『国富論』のつぎのような文章を引用している。「等量の労働は、時と場所のいかんを問わず、労働者にとっては等しい価値をもつものといえることができる。彼の健康、体力、精神が普通の状態、また彼の熟練と技能が通常の程度であれば、彼はつねに、自分の安楽、自由、幸福の同一部分を犠牲にしなければならない。彼が支払う代価は、それと引き換えに受け取る財貨の量がどうであろうと、つねに同一であるにちがいない。」(W. N., p. 33. 大河内訳<I>, 57ページ。傍点の付されている箇所はバーバーがイタリック体にしてある部分。) Barber [1967], p. 36. 邦訳, 42ページ。

15) なお、バーバーは、長期において労働の苦痛感をかなり変えてしまうかもしれない事情の例として、変化しつつある経済での諸仕事の専門化の進行やそれらの仕事の相違の増加、また、諸賃金表(wage scales)における諸変更といったものをあげている。Barber [1967], p. 36. 邦訳, 42ページ。

16) Barber [1967], p. 36. 邦訳, 42-43ページ。なお、バーバーは、ここでは、「価値尺度としての労働」のこの別形と先でみた労働尺度との関係といったことについては何もふれてはいない。

17) バーバーがあげているそれらの批判の一例は、注8でみたものである。

18) バーバーは、スミスがこの問題を提起しているものとしてスミスのつぎのような文章を引用している。「1時間の辛い作業におけるほうが、2時間のやさしい仕事におけるよりも、いっそう多くの労働があるかもしれない。また、習得するのに10年の労働がかかる職業に1時間はげむばあいのほうが、通常のわかりきった業務で1ヶ月働けばあよりもいっそう多くの労働があるかもしれない。」(W. N., p. 31. 大河内訳<I>, 55ページ。) Barber [1967], p. 53n. 22. 邦訳, 65ページ注22。

19) Barber [1967], pp. 36-37. 邦訳, 43-44ページ。

なお、アフナセフは、「異質労働の問題」に関するスミスの議論についてのバ

バーバーの議論にもふれている。ただし、いままたようにバーバーはスミスの議論に対して批判をくわえているのであるがそこではアフナセフはバーバーの議論をそのようなものとしてとらえていないために、いくぶん議論にずれがある。しかし、そこには、つぎのようなアフナセフの認識が示されているということが出来る。すなわち、複雑労働とは、それ自身でもって単純労働と比較できるものではなく、複雑労働の生産物と単純労働の生産物との比較をつうじてのみ、単純労働と比較できるものであるものであり、また、商品の価格はそれらの商品の価値の貨幣的表現である。それゆえ、いずれにせよ価値についての説明を与えるものが必要であるとともに、つぎのような考え方、すなわち、産出高を評価するための単位としての労働の質の相違という問題は「市場で成立する賃金格差という」市場検査で処理できるのであるが、市場検査という同様なやり方は産出高そのものの評価にも適用できるはずである、そしてそうであるとすれば「労働の単位数をつうじて確定されるものとしての」価値と現実の価格との区別という問題は消滅してしまうことになる、といった考え方は、誤ったものであり、またそのような考え方においては、いかなる有用性も労働価値説から引き出されないということになる。Afanasev [1976], S. 179. 邦訳, 206—207ページ。

なお、バーバーは他方でまた、どういう「労働価値説」であろうとそれをけなすことが現代の経済学者たちにとっての流行になっているけれども、もっと寛大な読み方をするのが適当であろう、として、つぎのような見解を示している。すなわち、こんにち、経済学者たちが成長率の見積もりにあたって諸価格が安定的なままであることを仮定するとき、あるいはまた、米英ソの経済的健康状態についての比較陳述が、ある代表的な労働者が特定されたある1群の財貨——たとえば、靴1足、ラジオ1台、あるいはまた自動車1台——を購入するのに十分なだけのものを稼ごうるためにはそれぞれの国においてどれだけの労働時間数が必要とされるかということに基づいてなされるとき、結局のところ、ほとんど同じ種類の知的営みがなされているのではないであろうか。Barber [1967], pp. 37-38. 邦訳, 44ページ。〔さらに、スミスの自然価格と市場価格との区別に類似した案はこんにちの低開発地域についての研究のなかでも援用されているのではないであろうかというバーバーの見解は、注7で見たとうりである。〕

W. J. バーバー (1967) についての覚書

バーバーは、スミスの議論では価値〔交換価値〕と価格とは区別されるべきものであり、価値は、市場価格（名目価格、現実の価格）と区別される「自然価格」に対応するものとして取り扱われているとみ、そして、市場の働きをつうじての市場価格の自然価格への収斂という形で市場価格の

動きについての部分的な説明を与えること、および、長期にわたる集計的経済変動を測定するための一つの基礎としての価値尺度を案出することを、スミスの価値分析の内容としてとらえ、また、経済成長を中心的なテーマとするスミスにとっては、後者のことがより重要なものであるものであった、とするのであった。

そして、バーバーによれば、スミスは仮説的な「初期未開の社会状態」については投下労働量が、他方、資本の蓄積、土地の占有の行われるより複雑な社会状態については支配労働量が価値の適切な尺度であるとした、とされ、そして、この価値尺度としての支配労働量というスミスの考えは、総産出高をそれによって購買しうる労働単位数のタームで表すことによって異時点間の総産出高の変化についての比較陳述が可能になるということ、を、暗に意味していた、とされるのであった。なお、バーバーによれば、一次接近としてはそのような労働単位数のタームでの表現は貨幣タームで表されている総産出高を基準賃金で割ることによって得られ、そして、各々の時点について同様の作業をして得られるそれらの値を調べることによって、それらの時点の間に成長が起こったかどうか、また、その経済の総産出高にどれだけの変化が生じたか、ということが確定できるということになるのであるが、このようなやり方にはいくつかの難点がある、とされるのであった。

また、スミスの価値分析における穀物に関して、バーバーは、スミスは「穀物の入手可能性」を、支配労働尺度の相対的に適用のより容易な一つの代用物とした、とみるのであった。さらに、バーバーによれば、スミスは労働の労苦と骨折りのために余暇を割愛するときに労働者がこうむる犠牲の安定性〔労働にともなう不効用の不変性〕ということを指摘するのであるが、スミスはそうすることによって、経済的な改善の程度は財貨の総体規模の変化によってだけでなくその総体を生産するのに要した尽力によっても判断されるべきであるということに注意を促していたのであり、そこでは、1単位の労働投入がより多量の財貨に対する支配力をもたらした

ときに経済的な改善が生じているとみなされうることになる、とされ、そしてバーバーは、このような考えをスミスの「価値尺度としての労働」の別形としてとらえるのであった。ただし、バーバーは、「価値尺度としての労働」のこの別形と先の支配労働尺度との論理的関係といったことをことさらに問題にしようとはしていないのであった。

さらにまたバーバーは、一方で、スミスの労働接近法に対してなされてきた批判の例をあげつつその批判に対するスミスの議論への弁護を与えようとするとともに現代の経済分析のなかにもその労働接近法に類似した考え方が見出されうるということを指摘しつつも、他方で、バーバーによれば、労働の単位数による測定に関連して異質労働の問題についての考慮からスミスは「市場のかけひきや交渉」ということに言及するのであるが、これは、労働の単位そのものは市場で成立する労働の市場価格の格差（市場で成立する賃金格差）に基づいて計算されるべきとするもの、つまり、価値を測定するための単位そのものを評価するために市場検査をもち出すものである、だがもしそのようなことで足りるのであるならば、その単位によって測られる価値そのものもなんらかの形で市場検査によって評価されうるはずである、しかしそうだとすると価値（自然価格）と現実の価格（市場価格）とを区別する問題は消え去ってしまうこととなり、ここに論理上の矛盾が存在する、とされるのであった。

(3) E. G. ウェスト (1969)¹⁾

ウェストは、スミスは事実上、「富」(“wealth”) という言葉によって(〔国民〕資本にかかわる) ひとつのストックではなくしてある期間にわたっての(国民所得にかかわる) ひとつのフローのことを言っていたのであり、そして『国富論』という書物の予示されている目的は1人当り実質国民所得を決定する社会的な諸原因の分析ということであったとしつつ、²⁾ スミスの価値尺度論に関連するつぎのような見方を示している。

①スミスは、『国富論』の第1篇第5章から第7章において価値あるいは

価格づけに関する諸問題を取り扱うのであるが、スミスはそれらの諸章において、価値の尺度 (measure)の問題と価値の決定の問題という二つの問題を議論した。³⁾

②第5章においてスミスは、長期的実質所得を測定するための「労働支配力」標準 (a “labour-command” standard) を厚生の指標として使用した。すなわち、各人がうんざりする労働を回避してそれを他人に課することができればできるほど彼は暮らし向きがヨリ一層良いのであり、労苦をそのように移転させたいという欲望が分業を促進するのであり、富の究極の標準は、各人がその富でもって市場で購買する他人の労働の量であるのであった。⁴⁾

③ところで、価値の指標 (index)としてあるものを使用することとこれと同一の「あるもの」が価値の唯一の原因であると主張することとの間には決定的な相違があるのであり、スミスがここで労働価値説への混乱した試みをなしたというマルクスの主張は、誤った解釈である。⁵⁾

1) Edwin G. West, *Adam Smith* (New Rochelle, New York: Arlington House, 1969). 以下、West [1969] と略記する。

2) West [1969], pp. 168-169.

3) West [1969], p. 169.

4) West [1969], pp. 169-170.

5) West [1969], p. 170. なお、第6、第7章については、ウェストによれば、スミスはそこでは実際にはひとつの労働価値説を略述したのではなくて、ひとつの(総)生産費価値説 [a (total) cost of production theory of value] を略述した、すなわち、スミスは、長期的には品物の自然価格はその品物を作るさいに使用されるすべての要素に支払うべきすべての金額——賃金、利潤、地代——の合計であるということを主張したのであり、そして、スミスは彼の先行者たちの間に広くいぎわっていた労働費用価値説 (the labor cost theory of value) を退けることに骨を折っていたように思える、とされる。West [1969], p. 170.

なお、アフファナセフによれば、資本主義において進行する諸過程の社会経済的な内容を隠蔽することを本質とする俗流的で弁護論的なブルジョア経済学の流れのなかにある現代のブルジョア経済学は、スミスの理論のすべての科学的な言明に反対しているのであるが、そのなかでもとりわけ彼の労働価値説およびその、諸商品の生産に費やされた労働が商品価値の源泉をなしているという最も重要なテーゼ

に、反対し、労働価値説なかんずくスミスの分析の反駁、歪曲、黙殺のために大きな努力をかたむけているのであり、ウェストのこのような見解もその流れのなかにあるものとされる。すなわち、スミスが価値は諸収入によって構成されているという見解を主張していたことは確かである、しかし厳密には、この変種は彼の理論体系の内部では二次的な役割しか演じていない、それにもかかわらず、スミスの諸学説のなかから彼の価値論の他ならぬこの非科学的な変種に特別の注意を払いスミスの「自然価格」というカテゴリーを歪曲しつつうえのような形で示されているウェストの見解は、価値論におけるスミスの誤りを現代の弁護論に使いやすいようにするという目的を追求するための荒っぽいこじつけである、というのである。Afanasev [1976], SS. 169-170, 174-175. 邦訳, 194-195ページ, 201ページ。

E. G. ウェスト (1969) についての覚書

ウェストによれば、あるものを価値の指標として使用することとそれと同じあるものを価値の唯一の原因とすることとの間には決定的な相違があるのであり、スミスは『国富論』の第1篇第5章から第7章において価値尺度の問題と価値決定の問題という二つの問題を論じたのであるが、「富」という言葉によって事実上、国民所得にかかわるフローのことを言っているスミスは、〔価値尺度の問題にかかわる議論を展開する〕第5章において、各人がうんざりする労働を回避してそれを他人に課することができればできるほど彼は暮らし向きがヨリ一層良いという意味で、富、長期的実質所得を測定するための「労働支配力」標準を厚生¹⁾の指標として使用したのであって、〔価値の原因・決定の問題に関するものとしての〕労働価値説への混乱した試みをなしていたというわけではない、とされるのであった。

(4) G. ロウザンブルース (1969)¹⁾

ロウザンブルースは、スミスの分配理論は彼の相対価格理論と統合されていないといった批判、とくに、彼の地代論は、価格についての彼の生産費説と結びつけて考えると循環論を含んでおりまたそれゆえ明確な結論を提出することができないといった批判、価値との関連での労働の役割についての彼の議論は矛盾を含むものあるいはもっとひどいものであるといっ

た批判, さらに, 彼は賃金率の決定に関していくつかの異なったまた部分的には矛盾した諸理論を主張したといった批判が, 従来, スミスの価値論に関連してなされてきたけれども, そのような領域ではスミスのモデルは一般に言われている以上に, 統合的な, 矛盾のない, 明確なものであったのであり, 価値との関連での労働についての議論, 賃金率についての議論, 地代についての議論は, 相互に関係づけられていたのだ, ということを示そうとするのであるが,²⁾ そのことを示そうとするロウザンブルースの議論のなかに, つぎのような見解が含まれている。

①スミスは, リカードウやマルクスのように, 労働含有量 (labour content) を, いかにおおよそのという意味においても相対価値を説明するものとしては, 使用したわけではなく, 商品が「購買または支配する」ことのできる労働の量を, 価値の測定物差しとして, シュムペーターのいうようにニュメレールとして, 使用したのであり,³⁾ 相対価格の説明として⁴⁾ は, スミスは, ひとつの生産費説を提出したのである。

②ところで, 価値尺度として労働を使用するということが確立されている『国富論』第1篇第5章においてスミスはたんに, 「指数方法をまったく知らなかったために」便利なニュメレールを見つけ出すことに関心をいだいていただけではなかった。スミスの目的についての道理にかなった一つの説明はゴードン⁵⁾によって与えられており, 彼は, スミスは商品が「購買または支配する」ことのできる労働の量を規範的な意義をもったひとつの絶対価値とみなした, という考えを提出するのである。二つの商品の絶対価値の比率がそれら二つの商品の「自然価格〔⇔生産費によって説明される〕」の比率に等しかったため, 商品が「購買または支配する」ことのできる労働の量は, ニュメレールという役割も兼ねるのであったのである。なお, その規範的な意義は, 労働の不効用は異時点間においても異場所間においても不変であるとみなされうるというスミスの仮定に, 由来するのであった。ゴードンも指摘しているように, 1人の人間が1着のスーツあるいは1足の靴を稼いで得るのにどれほど長く働かなければならな

いかということをも算定することによって我々が異なる諸経済における生活水準を比較するときには、こういった仮定はいまでもなされているのである。⁶⁾

- 1) G. Rosenbluth, "A Note on Labour, Wages, and Rent in Smith's Theory of Value", *Canadian Journal of Economics*, vol. 2 (no. 2, May 1969). 以下、Rosenbluth [1969] と略記する。
- 2) Rosenbluth [1969], pp. 308-309.
- 3) ロウザンブルースは、J. A. シュムペーターのつぎのような文章を引用している。「スミスは地域間ならびに異時点間の比較という目的のために、それぞれの商品の貨幣価格または『名目価格』に代えて、……^{リアル・プライス}実質価格すなわちあらゆる他の諸商品のタームでの価格をもち出してくる。そして、彼は彼の時代にすでに発明されていた指数方法をまったく知らなかったために、これらの実質価格をさらに転じて、(穀物がその役割を果たすか否かを考察したのちに) 労働のタームで表現されている価格に置き代える。換言すれば、彼は……ニューメレールとして、商品たる労働を選び出すのである。」(Joseph A. Schumpeter, *History of Economic Analysis*, edited from Manuscript by Elizabeth Boody Schumpeter <New York: Oxford University Press, 1954>, p. 188. 東畑精一訳『経済分析の歴史』<全7冊><岩波書店, 1955-1962年>, 第1分冊, 392ページ。) Rosenbluth [1969], p. 309.
- 4) Rosenbluth [1969], p. 309.
- 5) ロウザンブルースは、本誌第5巻第3号でみたゴードンのつぎの研究, Donald F. Gordon, "Studies in the Classical Economics: What Was the Labor Theory of Value?", *American Economic Review* (Supplement), vol. 49 (no. 2, May 1959) をあげている。Rosenbluth [1969], p. 311 n. 11.
- 6) Rosenbluth [1969], pp. 309, 311.

G. ロウザンブルース (1969) についての覚書

ロウザンブルースによれば、スミスは、相対価格〔相対価値〕を説明するものとして労働含有量を使用したわけではなく、その問題については、ひとつの生産費説を提出したのであるが、他方でスミスは、商品が「購買または支配しうる労働量」を相対価値の測定物差し、ニューメレールとして使用したのであり、同時にまた、スミスにおいては、商品が「購買または支配しうる労働量」は、労働の不効用は異時点間においても異場所間においても不変であるという仮定から、規範的な意義をもったひとつの絶対価

値を指し示すものでもあった，とされるのであった。